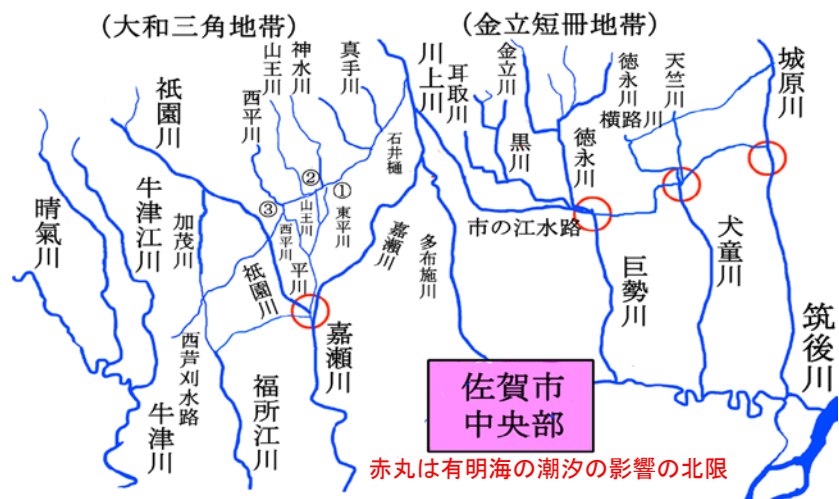


「佐賀平野における在来知としての伝統的治水技術の定量的評価と今後の流域治水に関する研究」

研究代表者：佐賀大学理工学部教授 大串浩一郎

明治以降の西洋の科学技術の導入により我国は大きく発展しましたが、その発展の過程で日本人が元来持っていた自然観・災害観が失われ、結果的に自然災害リスクが増大したとも言えます。令和3年から全国で始まった流域治水の具体的な方策策定は発展途上の段階ですが、明治以前に我が国に存在した伝統的治水技術は、「在来知」として地域で育まれた流域特性を踏まえた流域治水技術であったと思われます。特に佐賀平野では成富兵庫らの治水が著名で、国内最大の干満差を有する有明海の潮汐の影響も考慮し、自然との共生の上に作り上げた伝統的自然観を考慮した流域管理技術でした。

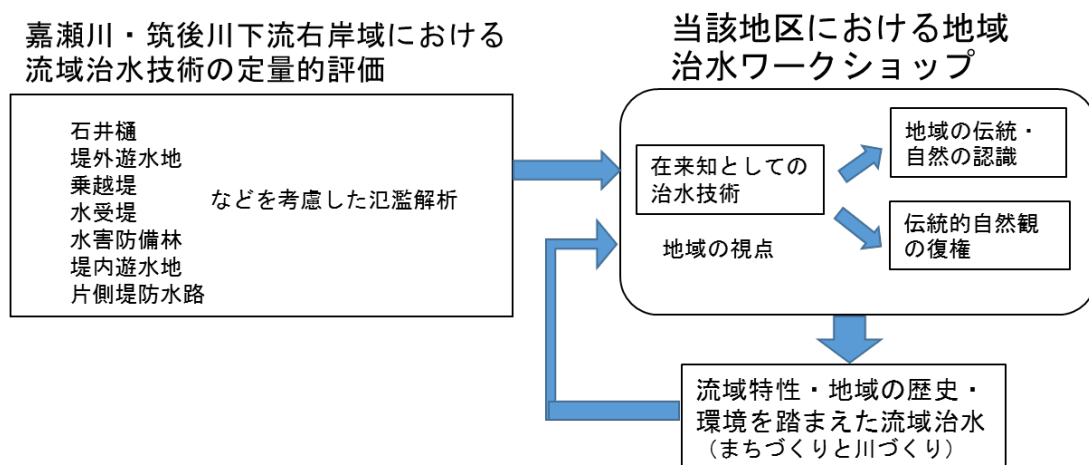
本研究では、そのような地域の伝統的自然観を取り戻し、「在来知」を活用した治水の再検討を行うため、佐賀平野の特に嘉瀬川流域・筑後川下流右岸域に着目し、伝統的治水技術の定量的評価を行います。また、明治以降に失われた民衆の自然観を再確認するために、地域の自主防災組織や行政の協力を得ながら、地域治水ワークショップを実施し、かつて地域に存在したであろう伝統的自然観の復権に繋がる関係者間の気づきを促し、今後の流域特性・地域の歴史・環境を踏まえた将来のまちづくりと川づくりの目指す方向について意見交換を行い、これからの流域治水方策策定への提言に繋げていきます。



佐賀平野北部の河川分布図

(昭和15年：5万分の1地形図より作成)

図－1 佐賀平野に広がる流域治水（岸原氏資料）



図－2 本研究のフローチャート